

句集 比翼連理

正司三刀・よし女



## 序

山口県宇部市の正司三刀、よし女ご夫妻がダイヤモンド婚を迎えられるにあたって記念句集を出されることになった。

ウェブサイト『ゴスペル俳句』の毎日句会で入選された作品は、どちらも五百句を超えていたが、妹背句集として一冊にまとめるために、それぞれ約半分に厳選することになった。

切磋琢磨された作品からは、確かな客観写生の技法により作者のやさしさと存問の心とが自然に滲み出ている。

畑のもの 訪ふも 日課や 霜の朝 三 刀

畑の 幸抱かえて 戻る 麦藁帽 よし女

三刀さんの作品には、家庭菜園に勤しまれるご自身を写生されたものが散見される。同時にそんなご主人の日常を気遣いながらやさしく見守っておられるよし女さんの姿も重なって見えてくる。これらの作品を鑑賞していると、永年の労苦をともに乗り越えてこられたお二人の深い深い夫婦愛が感じられるのである。

ドリーネは大地の笑窪冬ぬくし 三 刀

海の底めくカルストの野に遊ぶ よし女

ご夫妻はまた、秋吉台や其中庵など地元の名所を仲良く一緒に吟行されることが多いという。右記の作品は広々とした秋吉台の魅力を見事に写しとっとり、それぞれの個性がよく滲み出た作品と言えますよう。

この句集は、三刀、よし女ご夫妻が共に生きられた人生の縮図、貴重な証しでもある。お子さんやお孫さんたちにとっても素晴らしい道しるべになることを願ってやまない。偕老のよきお手本として、いつまでも仲良くお元気でいてくださいね。

薫風や比翼連理に半世紀　みのる

平成三十年三月三十一日

やまだみのる



正司三刀句集





釣り自慢して春を待つ漢かな  
寒禽の鋭声矢のごと雑木山  
山河いま光に満つる霜の朝  
糶果てて楳火を囲む魚市場  
白菜を真二つに割り日に晒す

理髮屋を出るや首筋空つ風  
青空へ金鈴散らす棟の実  
白髮の脳裏に今も開戦日  
葬送の煙と見たる枯野かな  
冬風を二夕分けに舟戻りくる

破蓮に這ひつくばりしカメラマン  
満ち潮の波音の余韻十三夜  
吾とわが影法師とが秋耕す  
雨晴れてより蜻蛉の空となる  
ひとところ夕陽に躍る花芒

秋暑し軒突き合はす漁師町  
草刈り機進む飛蝗を先立てて  
七つ星割りて飛び翔つ天と虫  
空蟬の背中に乾く土の色  
姦しき鶉の鋭声や紅葉谷

翻るとき白銀となる千鳥

剪定を終へて冬空広がりぬ

朝刊にチラシどつさり文化の日

太い腹ひきづり歩くいぼむしり

戦争の苦労話やふかし諸

愛らしき孫の絵手紙敬老日  
鍬の手をとめて帰燕を見送りぬ  
夕干潟秋思の吾の影法師  
睡蓮の花持ち上ぐは亀の首  
老骨の身ほとり抜けて風さやか

気休めと知りつつ庭に水を打つ  
暑に耐ふる水分補給怠らず  
冷房の店でて眼鏡やくたたず  
白球の放物線や雲の峰  
大草原滑空のごと夏燕

古惚けた昭和の扇子愛用す  
薫風裡卒寿の夢の続きみる  
町中が白くなりたる更衣  
狼煙めく煙ひとすじ麦の秋  
方丈の反り屋根高く桐の花



藤房に虻の羽音の大合唱

末黒野も雀隠れとなりにけり

山頂を記す標に鯉幟

群れ千鳥点描なせる大千瀉

春愁や診察待ちの椅子足らず

雪庭の己が足跡踏み戻る  
野に立てば早春の風頬を撫づ  
無音界とは斯くあらん雪の朝  
炊きたての麦飯に割る寒卵  
水墨の山河となりし雪の朝

打ち返す波音もまた年新た  
恙無きひととせ謝して冬至粥  
本堂の朱と競ふやに冬紅葉  
陽の当たる賽銭箱に冬の蠅  
夕時雨ほつほつ灯る街明かり

黄落の道こつこつとハイヒール

古墳へとのぼる階鴟高音

稲架襖端山の影の濃ゆく落つ

碧潭の湖を縁どる草紅葉

裏山の夕べはまこと虫浄土

波皺のたたみにたたむ良夜かな  
虫の音に励まされつつ畑を打つ  
帰省子の土産は出世話かな  
教会の尖塔しのぐ雲の峰  
爪弾きして穫りごろの西瓜選る

航空ショー大暑の空にハート描く  
一陣の風さきがけにはたた神  
サーファアの躍り出でたる波頭  
何処までも青田の続く米どころ  
特大の七夕竹や道の駅

時の日を刻む明治の掛時計

夏帽子阿弥陀に被るオシヤレかな

卯浪立つ沖に謂れの島二つ

動物園ベビーラツシユや聖五月

遠目なる山藤瀑布かと思ふ

春耕の鋤を杖とし腰伸ばす  
老木の幹黒々と花の雨  
蔵元の利酒に酔ふ花の昼  
春禽の声を背に受け畑仕事  
畦に腰おろし憩ふや犬ふぐり



宵闇を裂く恋猫の奇声かな  
早春の山並み撫づる雲の影  
水槽を衝立となす河豚料理  
木隠れに寒灯ともる喫茶店  
跡形もなしあれほどの実南天

平穩を謝して鐘打つ寒九かな  
畑のもの訪ふも日課や霜の朝  
冬野菜あれこれ詰めて娘に送る  
満ち潮の河口煌めく夕千鳥  
にこにこと苦勞話や菊あるじ

白波を延べる渚や十三夜

稲架の骨残して谷戸の昏れなんと

干潟の陽散らして群るる千鳥かな

小流れに沿ひゆく径は草紅葉

秋日落つ干潟に長き己が影

上棟の棟木収まる菊日和

金の鈴はた銀の鈴虫すだく

今日の月挙ぐる鉾杉襖かな

山頂を越えゆく雲に秋惜しむ

よく食べることが大事と生身魂

今朝の秋ふたはけみはけ絹の雲  
白雨いま神馬の像を洗ひけり  
大滝の二分けしたる巖かな  
洩るる灯に玻璃戸を叩く黄金虫  
涼風にふくらむ禰宜の袴かな

浮世絵の美女の眼差し涼しけれ  
離陸機を呑み込む梅雨の雲厚し

のど仏上へ下へとビールほす

野良仕事励め励めと時鳥

長汀の白砂踏みゆく夏帽子

雛鳥の安否気になる青嵐

赤がよく似合ふと老の更衣

図書館へ道まつすぐや楠若葉

版画絵のごとし干潟の残り潮

散り散りになりし早瀬の花筏

瀬にかかり序列崩るる花筏  
片脚を山頂に虹立ちにけり  
鳥帰る東北へ向き黙禱す  
伐採の切り株濡らす春の雨  
火が走り火守が走る野焼きかな



古草を分ければしかともの芽出づ

寒林を礫のごとく鳥の翳

夕千鳥煌めき翔ちし渚かな

福豆を噛みて機嫌や長寿眉

老夫婦相寄り添ひて寒に耐ふ

毬のごと枝に膨らむ寒雀  
福袋買ふべく列のしんがりに  
糶台の籠を跳ね出す桜鯛  
呆として柚子湯に肩を沈めけり  
水の面に風紋走る鴨の池

張替し障子明りに愛書読む

小春の日燦と裸婦像抱擁す

陽当たれる瓦礫の山に残る虫

剪定の鋏のリズム秋天下

岬鼻に佇み海の秋惜しむ

岬鼻へ続く秋思の靴の跡

湯の街の路地しつぽりと梅雨に濡れ

谷戸の郷畦という畦彼岸花

百歳を目指す意気ごみ新酒酌む

リハビリの吾を導く道をしえ

秋の雲亡き愛犬にふと似たり  
諸の飯炊いて傘寿の祝膳  
入院も避暑と思へば苦にならず  
雨脚のカーテンとなる梅雨の窓  
鉾杉を遙かに凌ぐ雲の峰

カルストの起伏野を這ふ夏の霧  
春天を二タ分けしたる飛行雲  
放たれし風船風に乗らんとす  
過疎の村なれど今年も初燕  
迫る火に放つ迎へ火野を焼ける

逆巻きて火が風を呼ぶ野焼きかな  
ドリーネの底まで走る野火のあり  
苔庭に春の日射しのやはらかし  
俯瞰する町も山河も朧かな  
底石に日の斑のをどる春の川

咳きも婦唱夫随でありしかな  
大いなる夢の書かれし賀状かな  
継ぎ貼りの障子に玉の日差しかな  
産土神の初松籟を聴きにけり  
病とも仲良しになり冬至粥



山茶花の紅白侍る門構へ

大いなる尻を振りふり鴨潜る

退院すポインセチアに迎へられ

養生という退屈や風花す

飽食の世や鈴生りに柿残る

冬の蠅陽射す障子に身じろがず  
木枯に首縮めゆく下校の子  
身に沁むや病室に吊る千羽鶴  
枯蠓螂といへども太き腹もてる  
命綱頼りに風の木樵虫

しろがねのドーム秋日をはね返す  
教会の塔の真上を鳥渡る  
命令す運動会のスピーカー  
秋の谿矢のごと飛ぶは鳥の翳  
作業着の背なに貼りつく残暑かな

草刈りてより生まれたる風の道  
夕帳包み高鳴る盆太鼓

島浮かぶマリンブルーの夏の海  
湯上りのうなじに打てる天花粉  
神にます千年楠や蝉しぐれ

庭を掃く箒に消えし蟬の穴  
赤子抱くごと採り立ての初西瓜  
丘の上の一揆の碑へと青田風  
橋桁の折れむばかりに梅雨出水  
父の日や地酒抱きて嫁来る

蒼天を貫く夏の燕かな  
白妙の鰭振る金魚天女めく  
婆様の杖ともなりて避暑散歩  
燕の巢売り家の軒をはばかりず  
黎明のしじまを破る時鳥

緑陰に園児のうたふ童歌

藤棚の下に集へる車椅子

藤棚にやまざる虻の羽音かな

露天湯に肩の沈みし花疲れ

退く波を追ひかけるごと磯遊び

鍬の手を休め憩へば燕来る

花の雲抜けきて海の展けけり

花の下ゲートボールの声弾む

ふところに大貯水ダム山笑ふ

鶴数羽声を落として北帰行



落椿敷く一門の墓どころ

山河いま墨絵となりし朧かな

麗らかや移動パン屋の楽流れ

青竹を巧みに磯の和布刈る

狛犬の眼鼻に触れて椿落つ

関門の速き流れに雛流す  
観世音像立ちませる雪間かな  
足に根の生えしと笑ふ炬燵かな  
杓で割る手水に張りし薄氷  
葬送の読経に深雪降り止まず

庭掃けば転びいでたる龍の玉  
雪被く五重の塔の気品見よ  
漁る鳶矢のごと落つる冬の海  
ドリーネは大地の笑窪冬ぬくし  
鳩の翳消えては現るる鏡池

海を見る枯野の端に腰下ろし  
通夜の道青く煌めく冬銀河  
酌み交すおでんに息を吹きかけて  
絡む陽に冬芽の産毛煌めける  
银杏散る大師の肩に足元に

来し方の記録の整理日記果つ  
銀杏散る歩道車道の隔てなく  
白壁に色を落としぬ熟し柿  
ふなばたを揺らす秋日の波紋かな  
草紅葉通ひなれたる五尺道

秋天へ飴す太鼓乱れなし

髪切つて金風過ぎる身のほとり

秋日影伸ばしきつたる亀の首

鰯雲余白の空の青きかな

望の夜の沖へ出て行く漁り舟

光芒に浮き立つ島や沖の秋  
係船の舳先しきりに鯨跳ねる  
幼帝の入水の悲話や瀬戸の秋  
帰省子を待ちて傘寿の祝ひ膳  
ただ今とぶつきらぼうに帰省の子

湯上りの傘寿おでこに天花粉  
在りし日の口癖真似て墓洗ふ  
S Lの笛長く曳く晩夏かな  
離陸機の真正面に雲の峰  
古扇開けば五言絶句かな



空 蟬を宝のごとく掌に  
瞑りて声明を聴く堂涼し  
岩 走る水石菖を梳る  
黒 南風の海千万の兔波



正司よし女句集



女正月なりし一日を炬燵守  
日常の煮炊きに戻る四日かな  
正月や孫に彼女が出来たとか  
スーパーのカートぶつかり合ふ師走  
鶴折るによきと取り置く古曆

傾ぐ舟転覆せずや海鼠突き  
無口なる婿に熱爛勧めけり  
娘の帰り遅しと仰ぐ冬の月  
係留の小舟を揺らす小春波  
行く雲に心あそべば小鳥来る

病葉をくるくる回す蜘蛛の糸  
朴の葉を宙吊りにして蜘蛛の糸  
ゆくりなく幼馴染とあふ墓参  
幾たびも外に出て仰ぐ無月かな  
出揃ひし双葉に畝の風さやか

一掬す名水に秋聞きにけり  
雨晴れて秋耕の鋤機嫌よし  
酸欠の金魚のごとく暑に耐ふる  
存問のごと朝窓をつつく蝶  
潮遠く引きたる沖に土用波



畑の幸抱かえて戻る麦藁帽  
ご神水なる湧水に鱒太る  
引ききつて広き干潟や雲の峰  
緑陰の人垣南京玉すだれ  
溺れゐるかなぶんぶんを救出す

藁屋根と玉垣結び蜘蛛の糸  
尺取の宙測りをる葉先かな  
耳鳴りにあらず今のは時鳥  
梢洩る日のもみ合へる青嵐  
わたしには格闘技なり布団干す

梅雨じめりしたる速達とどきけり

潮騒に紛る祝詞や磯祭

畑仕事しばし休めと初蝶来

鶯に励まされては鋤握る

咫尺なる初音に鋤を休めけり

うららかや品評会の犬あくび  
眼鏡拭くわが白息を吹きかけて  
神木にハグする女子や春うらら  
焼芋の笛がわたしを呼んでゐる  
もぐら道走る畑に物の芽出づ

湯宿の灯芽吹きの樹々へこぼれけり

雪間道踏みて富山の薬売り

夫に買ふバレンタインのお饅頭

春炬燵孫に折り紙習ひけり

赤札を返して思案植木市

名を呼ばれ春眠覚めし美容院  
菜を洗ふ手に水温むさふ思ふ  
数へ日の漁港湧きたつ糶場かな  
大漁旗砦をなしぬ牡蠣の小屋  
巻き癖を巻き戻し吊る新曆

凍て空へのぼる無人の観覧車  
抽んでて時計台見ゆ枯木立  
古寺の目張りだらけの白障子  
甘藷掘る手元狂ひて真二つに  
野遊びの一人が転ぶ縄電車

偲びつゝ遺句集を繰る夜長かな

幼顔して目高見る卒寿翁

吟行に膝掛け持ちて出かけけり

ネクタイは青空の色七五三

渚辺に波音を聴く秋思かな



遠干潟綺羅と見えしは千鳥かな  
夫のもぐ柿をタモ網伸ばし受く  
うららかや自転車籠に犬眠る  
新藁で宮居の土俵造りかな  
カルストの芒隠れにバス走る

雨音に間遠となりし法師蟬  
赤とんぼぶつかつてくる浜の道  
子ら来ると西瓜畑に急ぐ夫  
ひまわりの百万本が吾を見る  
夜の更けて海の匂ひの髪洗ふ

ドーナツの穴から覗く雲の峰

昼寝覚め主婦であること忘れをり

夕風の潮入川を海霧走る

墨汁をぶちまけしごと梅雨夕焼

歯ごたへのある男手の胡瓜もみ

皮剥けばグリーンピースの躍如たり

春愁や亀裂の深き闇魔像

陋巷もつばめ銀座となりにけり

棚藤に虻の羽音のハーモニー

湖ま青とどまりがたき落花かな

花吹雪誘ふ回轉木馬かな

春愁や点滴はまだ続きをり

糶声の一と際高し桜鯛

さみどりの藻草打ち上ぐ白砂浜

春の鳶碧天に輪を重ね合ひ

切干の真向き背きに乾きけり

糶場洗ひ了へて囲めり浜焚火

工場の白煙春の雲となる

鳩をかし潜りてはまたあらぬ辺に

泡を吹きつつ潮木燃ゆ浜焚火

風花の乱舞に笑まふ野辺仏

あひ寄りて微動だにせぬ寒の鯉

遮断機のなかなか開かず北吹けり

満ち潮に影重ね合ふ夕千鳥

群千鳥沖の潮目にまぎれけり

ちやんちやんこ快癒の夫へプレゼント  
マスクしてスツピンの顔隠しけり  
くさめして血圧計の小躍りす  
家寒し母逝きてより鎖ししまま  
ドリーネの底ひを埋むすすきかな



桜紅葉予科練の碑に降りやまず  
ご法話に抱腹絶倒秋思消ゆ  
カルストの一望千里秋惜しむ  
水脈に水脈重ねて鴨の陣進む  
酒蔵の蕘を濡らす良夜かな

観覧車回して進むいわし雲

ボクサーのごと鎌挙ぐる螳螂かな

着るものはゆつたりが良し夕端居

西日いま三角屋根に乗つてをり

盆踊り夫の音頭で始まりぬ

蛇と眼の合ひし恐怖に金縛り  
おしぼりの熱きが嬉し夏料理  
満開の睡蓮に廟開け放つ  
激辛のカレーを食べて暑に耐ふる  
学舎の終鐘ひびく夕涼し

女子アナは和服で取材菖蒲園  
肩車されて実梅をもぐ子かな  
緑陰に昼餉どきなる郵便夫  
畑仕事今日はやすめと雨蛙  
みどりごの足裏にママの名聖五月

緑陰に夫と二人のティータイム

母の日や詐欺にはあらず子の電話

青嵐や恋路の絵馬を打ち鳴らし

春水を掛けても笑まぬ不動尊

川筋は蛍銀座といひつべし

海の底めくカルストの野に遊ぶ  
小旋風に藤房の虻みずなんぬ  
花吹雪納骨堂を出でしより  
花鳥賊の墨の狼藉糶の土間  
湖風にタクト振りみる花ポピー

園うらら楽譜の碑より曲洩るる  
賞の札つけし洋蘭よく香る  
小港の糶湧き立てり桜鯛  
啓蟄や試し履きせるスニーカー  
山焼きの合図四方より火が走る

山火燃ゆ古代は海の底といふ  
相互ひ病抜け出て春迎ふ  
新しき季寄せを買ひて春を待つ  
測量士四温の畦に地図広げ  
寒肥す猫の額の畑なれど



凍て棚に伏せ並びたる闕伽の桶  
病抜けて寒紅薄くさしてみる  
初糶の一本締めを決まりけり  
医通ひの予定日印す初曆  
初雪に白変したる野面かな

飛び跳ねて意気軒昂や歳暮海老

老夫婦切り分け食ぶる聖菓かな

デパ地下の半額タイム日短

病者あひ励ましあひて日向ぼこ

編み上がる正ちやん帽に夫笑顔

留守宮の杜に高鳴るトランペット

吾が肩の今日は機嫌や毛糸編む

鶴飛来減るを嘆かふ翁かな

遙拝ですます山門日短

日を弾き錐もみ落つる銀杏かな

カメラ族SLを待つ苧田かな  
秋惜しめとぞSLの遠汽笛  
洗濯機渦に浮ききし零余子かな  
不老水汲場のむかご頂きぬ  
去ぬ燕無事にと祈る病者かな

鶏頭花志士集結の野に燃ゆる

浦夕べ白銀光り鯨跳べる

新松子坑夫の像の肩を打ち

カルストの起伏輝ふすすきかな

馬上より見ゆカルストの大花野

松原を抜けて展けし秋の灘

曼珠沙華砦としたる山家かな

日向より日陰の曼珠沙華が好き

曼珠沙華一揆の碑立つ畦に燃ゆ

稲刈機鳴り止み亭午かと思ふ

洞深き神なる楠の樹下涼し

青畝師の句碑を好めるとんぼかな

参磴によき影落とす青楓

延命水汲むはこちらと道をしえ

胸元に蜘蛛の囿纏ふ坑夫像

白シーツパリンと乾く五月かな  
香り立つ新茶は夫の手揉みかな  
干し大根ガードレールを埋め尽くし  
長汀の鳴き砂踏みて春惜しむ  
屹立す奇岩の山に躑躅燃ゆ



貯水ダム水満々とつつじ燃ゆ  
野焼の火渋りし跡か虎模様  
あちこちに置く春塵の老眼鏡  
堆く積む奥宮の落椿  
自販機で買ふ名水や山笑ふ

病む膝を撫でて正座す雛の前  
鳥帰るザビエル塔の天さして  
軒樋の中より翔てり恋雀  
野路往くは朝帰りらし猫の夫  
踏めば鳴る白砂の浜の余寒かな

一幅は一筆富士や床の春

里山は一夜の雪に白変す

探梅行夫の靴跡恃みとす

神楽太鼓打つ青年の耳輪揺れ

一燭の凍つるばかりや瀧不動

凍る池砕きて鯉の安否問ふ  
掌に転ばせてをる竜の玉  
異国より子の声弾む初電話  
退店を詫びる葉書や年の暮  
エプロンの夫を助手とし節料理

冬麗や濃き山影を野に落とし  
灯台をこぼれ翔ちたる冬かもめ  
酒好きも長寿の秘訣ちやんちやんこ  
寺師走磴駈けのぼる宅配夫  
前後左右揺り動かして大根引く

靈水を汲む北風にうづくまり  
と見る間に消ゆ山裾の冬の虹  
日射すとき銀の綺羅々や浜千鳥  
疾駆せしライダー落葉舞ひ上げて  
堆き落葉隠れに遭難碑

おでん鍋銘酒五橋の封を切る  
今年また風の道へと掛け大根  
山国の日差しは貴重蕎麦を干す  
一と日掃き忘れしに斯く落葉嵩  
延命水汲むに列なす神の留守

波立てて諍ふ鯉や神の留守

露万朶なる野の草に朝日射す

露の門くぐり深山の古刹訪ふ

波騒ぐごとカルストの芒原

沖汽笛今届きたる秋思かな



糶果てし漁港の椅子に秋思かな

秋航の水脈はヴァージンロードめく

秋思憑く坑夫の像に佇ちてより

平家塚さまよふごとく秋の蝶

野路行けば先へ先へとばつた飛ぶ

流木に坐して沖見ゆ秋思かな  
浜散歩赤とんぼうを引き連れて  
色変へぬ松や馬関の天へ伸び  
秋霖に濡れし夕刊とどきけり  
彫り深き魚板の窪み西日射す

新涼やロバのパン屋の樂届く  
解脱門くぐる我らに法師蟬  
帰省子とセピア色なる写真繰る  
西瓜抱き畑より戻る夫笑顔  
引潮の忘れ藻蟹の遊び場に

灼け砂や錆びて朽ちたる捨て錨  
連なりて出て航く漁船雲の峰  
大空のシヤンデリアなる揚花火  
遠河鹿鳴く深吉野の泊まりかな  
標本のごと鮎の骨抜けにけり

段畑を登りゆくごと夏の霧

蛍狩り歓声上がる山の宿

今年竹すつくと大志あるごとく

緑陰のベンチで二人句会かな



あとがき

『ゴスペル俳句』に参加させて頂いたお蔭で、細々ながらも俳句ライフを続けてくることができました。病との戦いもありましたが、家内の支えや俳句仲間の励ましによって乗り越えることができました。感謝です。

米寿を迎える今年は、私たち夫婦にとりましてもダイヤモンド婚という節目を迎えることから記念句集をと思いたち、みのあるさんにご相談したところ驚くほど短期日のうちに実現することができました。

記念句集の編纂にあたり、「比翼連理」という句集名とともに身に余る序文を賜りましたことは望外の喜びです。再選とコンピュータによる原稿作成の労をとってくださったみのあるさん、印刷・装丁などの細かなお心遣いをいた

だいたさつきさんのお二人に心からの感謝とお礼を申し上げます。

正司 三刀

裏畑の花菜を摘みながら、主人と共に歩んできた六十年を振り返るとき、悲喜こもごもの思いが過りますが、日々の暮らしに対処しながら、四時随順、自然に心を遊ばせて句に詠む生活が慰めであり支えでした。

健康に気を配りながらこれからも句作を続けていければと願っております。私たちのために素敵な記念句集をプレゼントしてくださった、みのるさん、さつきさん、本当にありがとうございます。

正司よし女



『比翼連理』

正司三刀・よし女妹背句集

平成三〇年四月十五日 印刷

平成三〇年四月十五日 発行

編集 大田さつき  
印刷製本 大田さつき